

プライドとファイトを ― 叡山の「回峰行」より ―

葉 上 照 澄

今日は大変意味のある日に呼んでもらってありがとうございます。実は一昨年、来ることになっていたので、他の人に代わってもらって、杉山先輩〔杉山久男氏〕に「約束を守れ」と叱られました。比叡山に一山会議というのがあって、今日も本当は無理だったんですが、そとと抜け出して来しました。

一、岡中時代

制服と角帽のプライド

先ほど赤木先輩〔赤木元蔵同窓会理事長〕が何と言われたか知りませんが、私も岡中におった頃、必ずこの記念式典に言われる言葉があった。いわく「イートン中学はシルクハットだ」。私も毎年必ず、年に一度だけでも聞いた言葉です。これは「イートン中学はプライドを持っている」という意味だったと思います。私は先ほど先輩の紹介のごとくこ

プライドとファイトを―叡山の「回峰行」より―／葉上照澄

の六高〔第六高等学校、岡山大学の前身〕から東大に行った者ですが、一番嬉しかったのは、もとの岡中に入った時、これが一番嬉しかった。ちっちゃいちっちゃい奴が、ボタン七つあってね、角帽でしょう。まるでフクチャ[※]ンです。それがですね、角帽かぶって電車なんかで腰かけていられるかという一つのプライドを本当に持っていました。

先生との出会い

いい先生ばかりでした。昔のことはよく思えるのだろうけど、私は忘れられないことがたくさんある。たくさんあるが、中でも中学二年の時にね、佐々木先生〔佐々木鉄太教諭〕という漢文の先生で、修身の先生がおられた。その先生が、「人間はつまらんことは負けとけ」ということを言われた。「人生にはいろんなことがあるけれども、どうでもいいことかたくさんある。一〇の中まあ八つくらい負けとつても構わ

ぬ。しかし最後の、これだけは絶対に譲れんというのだけは負けてはならぬ。これが本当の勇氣あることだ」。僕はこの言葉はおもしろいと思った。だから、他のことはどうでもいい、「はいはい」と言っておく。しかし譲れんことは絶対譲れん、筋だけは通さないと駄目だ。これは佐々木先生のお蔭だと今でも思っている。君達は若いから血の気がたぎっているし、やりたいこともたくさんある。本当に譲れんことは筋を通さないといけない。だが、たいしたことのないことは「はいはい」と言っておけばいいのです。もう一つ先生のありがたいことを話すと「お前達田舎の学校の生徒は数学で勝負しろ」、これは今でも言つとられると思う。「都会の生徒の英語には勝てっこない、数学は零点とれるかわりに一〇〇点もとれる。都会の奴と競争するには数学を中心にしなければ駄目だ」と言われた。口はばつたことを言うようだが、私が六高の試験を受けた時には、もう入ったというようなことで何ともなかった。数学はみなできた。平気ですよ、これは。「数学に重点をおけ」と言われたお蔭です。先生はありがたいなとつくづく思いました。

私も大学を出てから先生稼業をやった。私立大学で一六年教え、それから比叡山に入ってから、比叡山高等学校の校長を五年した。中学も比叡山幼稚園の園長も僕が初代です。

二、叡山の「回峰行」より

私が教えなかったのは小学校だけ、だから小学校の批判はしないでおく。だけど中学では、「一体何をしていたんだ」と、私はぼろくそに言っているのです。中学一年のあの記憶力の旺盛な時を君達はどうかうか過ごして来たでしょう。私の高等学校では、一年生に中学一年の英語なり数学なりをやらせて、やり直しました。今からでも遅くない、一から基礎からやらないといくらやっても駄目だ。ことに数学は暗記ものだ。すぐれた人が一〇〇年もかかって考えた公理を、君らの頭で一時間や二時間でわかるはずがない。基礎さえでき、それを応用したら何でもないので。だから今からでも手遅れじゃない。基礎からしっかりやり直す。必ずものになります。私の高等学校ではそういうふうにしました。

あまり大きなことは言えませぬ。明治一〇〇年の価値は、士農工商の階級打破にあると思う。一〇〇年前の日本の姿ではインドのことは笑えませぬ。そこで頭のある奴は皆坊主になった。この中で特に優秀な者を叡山に集めた。だから坊さんが指導的立場に立つのは当たり前です。法然、親鸞、道元、栄西、日蓮、旨意、

長を五年した。中学も比叡山幼稚園の園長も僕が初代です。

人たちの中には、軍隊に志願しようという者もあったが、思いとどまらせて、一人は岡山医大の助教授、あとの六名は東大工学部に入れたのであります。

二、叡山の「回峰行」より

誇り高き坊主頭

私は四四歳、つまり日本が戦争に敗れた後、昭和二十一年の三月から比叡山に入り、そして頭を剃った。なぜ頭を剃るか、その話を聞いてもらいましょう。なぜ坊さんが、坊主頭といって髪を短くするか、それには二つ理由がある。

第一は階級打破なんです。階級というものを打破しようというのがこの誇り高き頭なんだ。この階級という非合理、不合理な世界なんて、あってよいものではない。これを何とかしようというのがお釈迦様の出現なんです。人を生まれによって差別してはいけない、どこで生まれたかということと差別してはいけない。心と行いが差をつくるだけなんだというのが仏教の教えなんです。お釈迦様は、あまり大きな国ではないけれど、生まれは王子さんなのです。武士の階級、ガンジー、ネールも同じだが、それでいて、そんな階級を打破するため、「わしの弟子になった奴は頭を短くしろ」と言われた。そうすれば、前がお医者さんであっても百姓であっても同じことでしょう。その意味でこう剃るんです。階級打破、日本でも

あまり大きなことは言えませぬね。明治一〇〇年の価値は、士農工商の階級打破にあると思う。一〇〇年前の日本の姿ではインドのことは笑えませぬね。そこで頭のある奴は皆坊主になった。この中で特に優秀な者を叡山に集めた。だから坊さんが指導的立場に立つのは当たり前です。法然、親鸞、道元、栄西、日蓮、皆そうです。

ところでもう一つ。特に、僕のように叡山に入って二〇年もたつた者について思っでござんなさい。「行」の時は毎日剃る。なぜ剃るか、そのことを聞いてもらいう前に、杉山先輩がちよつと言われた叡山独特の「行」があつて、それをやる者は必ず剃らなくちゃなんのです。回峰といつて、比叡山の峰々谷々を毎日一〇〇〇日間、三〇キロ、七里半という距離、これを歩きまわる「行」がある。これにどういう意味があるか、そしてその結果どうなるかということとは別だ。「君みたいなインテリがなぜそれをやったか」、「それがいかなる価値があつたか」と盛んにラジオで甲南大学の寿岳文章さんが、「この人に聞く」という番組で聞かれたが、「そんなことは知らん、一〇〇〇日間そんなことをやっても何にもならん」と言つていたが、この「行」に入ると頭を剃らんといかんだ。端的に言つたら「命をかけて致します」という証拠ですね。命をかけてやれば何でもできる。私は子供もなければ、親兄弟もないが、私の現在の心境は君達がしっかりしてくれること、これ以外に望みはありません。まして君達は最も愛

する母校の若い人達でしょう。あとのことはどうでもいい、だから声を大にして言いたい。「若者よプライドを持て」と。プライドなき時は墮落あるのみです。

好きなことを思う存分に

私は大学へ行く時に何をやるかと考えた。君達も考えるだろう。世の中で一番いいことは、好きなことをやることだ。嫌いなことを嫌々しているほど不幸なことはない。私なんか人が見たらおそろく、「何だあいつは」と思うだろう。そんなことは放つといってもらいたい。得心してこうやって頭を剃つて、いつ、どこへ行くのでもこの格好で歩いとる。ちつとも構わん。私は喜んでやつとるのだ。徳富蘇峰^{※2}の言葉に、「世の中を動かすものは政治家だ」というのがあります。これは何といつても事実です。ちゃんと法律を作つてどんだん動かしてゆく。「その次に人類の文化を進歩させるものは学問だ。したがって学者が大切だ」と言っております。私は今比叡山におるが、学問を尊重しない、学問と初めから矛盾するような宗教は嫌いだ。しかし学問だけでは解決せず、人間には心という作用がある。それで今は宗教界に入っているのだ。仏教には一三〇〇年もの歴史があるから、本旨と関係のない垢がたくさんついているが、それを捨てて、しかも学問を超える世界でなくてはならん。徳富蘇峰をして言わせれば、政治が一番大事だ、しかし政治家は悪い。学問が一番大事

だが、学者は駄目だ。そこで学者のいいところと政治家のいいところ両方を総合したものが新聞記者だ」と言うんです。その自覚のもとに、彼はジャーナリストをもつて一生を終わつた。この蘇峰の言葉は、いろいろ批判があるだろうけれど、私はこの意味で学者たらんとしたが、落第して新聞記者になった。そして終戦頃ちよつと政治もやつたが、俄然、頭を剃つた。これは逆コースですね。しかし私の気持ちにおいては何時の時も同じです。どうか若い人がしつかりしてほしい。もうこれ以外に私の願うことはない。何も東大に入ることがしつかりすることではない。それぞれの能力に応じてそれぞれの好きな事を思う存分にやることだ。

私の念願

私は、今年中に、インドに日本のお寺を建てます。金はないくてもやつてやろうと土地を借りました。インドに疎開です。あと四年たつて七〇歳になったら、僕らは技術もないんだし本当に駄目だが、東南アジアへ行こうと思つています。私の本当の念願はビルマ「ミャンマー」です。私は七〇歳になったら、ビルマへ救難^{きうなん}「ハンセン病の患者を救うこと」の病院を建てようというのが念願です。そのために、お医者さんや看護婦さんも養成しています。けれども、私自身はもうできそうにもない。ただこう言っています。「なるほど、七〇歳で行つたって何もできんだろう。しかし死ぬぐらいのことは

できる」と。まあ行つてみて日本人の墓があつたら、それを乗り越えてやつてゆくというふうな、若人達が一つの夢を

最後の二〇〇日はもとの三〇キロにかえる。全コース四〇〇〇キロ歩くことになる。この「行」には二つの特色がある。

「政治が一番大事だ、しかし政治家は悪い。学問が一番大事

で行ったって何もできんだらう。しかし死ぬくらいのは

できる」と。まあ行ってみて日本人の墓があったら、それを乗り越えてやってゆくというふうには、若い人達が一つの夢を持ってほしい。将来のことだからどうなるかわかりませんが、これだけの夢は持っています。まして若い君達が夢なくて何の人生ぞやと言いたい。フイヒテ[※]という人は、ナポレオンがプロシアをやった時、ラッパの音や太鼓の音に消されながらも、有名な「ドイツ国民に告ぐ」という講義をした人です。ゲルマン民族の優秀性を信じ、その自覚をうながし、そしてベルリン大学の第一回総長になった人です。フイヒテを卒業論文に書いた私として、「日本が負けて、のんびんだらりとしておられるか」と思った。これが私の比叡山に入った動機です。岡山でも若い者を集めて塾をやったが、これも「一から出直しだ」と言うて、先ほどの「行」に入ったわけです。

千日回峰の行

この「行」は何かというと、一〇〇〇日間、年単位一〇〇〇日、毎年一〇〇日ずつとすると一〇年かかる、これが一一〇〇年の伝統です。伝統というものはいいかげんのものではない。この一中の伝統も、私はいろいろのものとあると思うが、合理的なものが伝統だと思う。はじめ三年間は一〇〇日ずつ、四年め五年めは二〇〇日ぶっ続けて三〇キロ毎日歩く。六年めは六〇キロ、七年め、八〇一日から一〇〇〇日間は八四キロ、

ブライドとファイトを―叡山の「回峰行」より― / 葉上照澄

最後の一〇〇日はもとの三〇キロにかえる。全コース四〇〇〇キロ歩くことになる。この「行」には二つの特色がある。この「行」に入ると一〇〇ないし二〇〇日間はどんなことがあっても休むことを許さん、これが鉄則です。そうすると私には言うたものです。「病氣したらどうするか」「いやしくも行に入って病氣するとは何事だ。心がルーズな証拠だ」と叱られる。緊張しとると病氣しないのです。私は三〇〇〇日やっとする人間です。私は中学校の時は虚弱児童で、小学校の時は小使いさんにおんぶされて帰ったような人間です。三〇の坂を絶対に越せないと言われた人間です。それが、四五歳から五一歳まで、五一歳のときに毎日八四キロ歩いたんです。この中でどんなに力がある人でも八四キロ一日歩いてごらん。必ずへばる。僕らのようにトレーニングを積むからやれるんです。そして最後は落としてあるでしょう。本当に合理的なものだと思うが、その一〇〇日ないし二〇〇日はどんなことがあろうと休むことは許さん。もし休んだら切腹す束を著て、小田原提灯を持って出る。昭和四三年の今日、病氣欠席を認めない世界がどこにあるか。ま、無茶ですね。ところが、その無茶が通るんだからしょうがない。私はやっただけです。

ファイトをもつて

私は阿闍梨あじりというのでして、叡山の阿闍梨さんといったら私のことです。阿闍梨といったら先生ということですけどね、模範的先生という意味らしいんです。私はこの「行」の監督責任者です。私は父兄を呼びましてね、この「行」はそういうものだ、嫌なら初めから止めておけばいい、やった以上はどんな理由があろうと病氣欠席は認めないのだと話すのです。そうするとね、たいてい一〇〇日はやれるんです。人間というものはおもしろいもんです。その代わり血の泪で拌まぜむんです。一生懸命に拌むより手はないのです。そうするとやれるんです。私のように五一歳になつて八四キロ毎日歩けるんです。つまり人間は覺悟が大事だということです。ようしやつてやろうとファイトを燃やしたら必ずやれる。私に言わすならば、「ファイトなきものは去れ」です。ようしやつてやろうというファイトは田舎の高等学校におつたお蔭、六高や岡中におつたお蔭だと思いました。「君らはそれでいかなくは駄目だ、都会の者に勝つのはそれしかない」ということを僕は岡中時代に教わつたんです。私みたいなものでも四〇〇〇キロなぜ歩けたか。学校教育のお蔭だと思います。もう一つの特色は頭を剃つて、畳の上からわらじを履いて出て行くんです。よし死んでやろうと覺悟して出て行くんです。再び帰らざる死出の旅路に向かつて出て行くんだ。そうすると生

ノー・ドリンクです。若い時はいくらでも飲んでおつたんですが、人間というものはこの年になってみると、一生の間にしなくちやならんことが決まっているような気がする。だから酒の量も決まつてたんでしょね。私は四〇歳までに一生

かされて帰つて来るという人生、私はこれを三〇〇〇日やつた。虚弱兒童の私がです。しかし腹の中では佐々木先生の教えを守つてここは負けどころ、しかしこれだけは負けられんと、これがモットーです。そうすると病氣をしないんだ。この話を聞いた以上君達は三年間病氣したら承知せん。いつも苦しくなつたら私のことを思い出せ。

科学を超える力

先ほどの断食の話、これもいいかげんのものではないんです。五年たつて七〇〇日済まんものには断食はさせない。五年たつて七〇〇日したら断食断水というのに入る。水一滴も飲んではならない。不眠、寝てはならない。不臥、横になつてはならない。七〇〇日済んだらこれを必ずやらなければならぬ。済むまではやつてはならないことになつとる。人間にとつて、太陽の光と熱、空氣、その次に水が大事だ。水さえ飲めば二九日は生きられる。水も飲まん叡山の断食はよそにはない。これも一〇〇〇年の伝統です。水も飲まなんだら三日で死ぬというのが学界の定説です。ところが私どもには一〇〇〇年の伝統として、断食、断水、不眠、不臥が九日とある。昔の九日というのですから満八日でしょうね。これを私は何度もやつとるんです。

それから私はノー・ミート、ノー・フィッシュです。坊主になつた以上、魚や肉を食つては駄目だ。ノー・スモーク、

含んですぐばつと出す。いずれにしても断水というのは叡山以外にはない。ガンジーでもない。それもこれも、よしやつてやろうというファイトを燃やせばやれるんだ。もちろん無限ではないがね。おそらく一〇日やつて死んだ人がいると思

帰らざる死出の旅路に向かって出て行くんだ。そうすると生

になった以上、魚や肉を食つては駄目だ。ノー・スモーク、

ノー・ドリンクです。若い時はいくらでも飲んでおったんですが、人間というものはこの年になってみると、一生の間にしなくちやならんことが決まってるような気がする。だから酒の量も決まってるんだよね。私は四〇歳までに一生の分量を飲んでしまったかもしれない。若い間、のほほんとしてたから、年とつて苦勞しなきゃなんのだと思う。その意味では若い時に苦勞した方が楽だ。君達も若いうちに努力してほしい。だが、苦勞がその人にマイナスになってはいけない。先ほどの断食、断水、不眠、不臥ですがね、三日目には死人のおいがしている。細胞が分解しますからね。口の中は燃えている、それでじつとしてるのではなく、いろいろ仕事があるんです。例えば夜中に水を汲みに行くんです。一滴も飲めない者がお供えのあか水を汲みに行くんです。つの救いでもあるんです。部屋の中へ私を閉じ込めて、それで九日間寝させない方法が合理的にできてるんです。そして五日めの午後、うがいが許される。ちょうどこのくらいの素う一つ載っている。こちらへあけるといいます。こちらのほうが増えねばならんというんです。唾があるじゃないかと。これではガラガラなんて怖くてできません。のどもと三寸でつるつとといったらどうにもならん。それでは五年間七〇〇日の苦勞が水の泡となる。若い者ならいざ知らず、私は四九歳の時だし、命がけでやつとる者がそれでは何にもならん。

ブライドとファイトを―叡山の「回峰行」より― 葉上照澄

含んですぐぱつと出す。いずれにしても断水というのは叡山以外にはない。ガンジーでもない。それもこれも、よしやつてやろうというファイトを燃やせばやれるんだ。もちろん無限ではないがね。おそらく一〇日やつて死んだ人がいると思う。それで、五日や一週間では足らんというので九日という線ができた。お茶の作法みたいなものですね。よそから見ると煩わしくてかなわんと思うが、あれが簡素な綺麗な一つの線なんです。だから九日迄は生きられるんです。絶対死ぬ「行」なら、これは人道上許されません。個人差というものがあるから絶対安全とは言えないが、絶対死ぬんではないというぎりぎりの限界線へ追い込んでいく。そうするといかに精神力が作用するかということがよくこれで分かるんです。私は八日め、東大の吉村教授の診断では瞳孔反応なく「葉上さん死んだぜ」と言われた。「生きておる」と答えたが、それは聞こえなかったようだ。七日めあたりから意識が冴えてくる。一〇日やつたら必ず死ぬるでしょう。私はこれを何回もやつとる。これには一つの暗示が、九日という暗示があるかもしれない。不合理の無茶苦茶のようであつて、やればやれる。科学を超える世界がそこにありはしませんか。

三、おわりに ―愛する諸君へ―

私は今日は内輪なもので雑駁な話をしましたが、少なくとも人間、ようしと覚悟したら、突破できるんです。それぞれ

の立場でね。いろんな条件を考える必要はあるでしょうが、
以上のような世界があるということなら、「もつともつと勇
気を出せ」ということ、これが私の言いたいことなんです。
まして本当に期待し、「一番愛している君達、どうぞしつかり
頼みます。」
(昭和四三年一月二日、於本校大講堂)

註

※1 昭和一一年頃から長期に渡って朝日新聞に連載された漫画。
大きな帽子をかぶった男の子が主人公。

※2 一八六三年〜一九五七年。評論家。『国民之友』・『国民新
聞』を創刊し平民的欧化主義を唱えたが、後、国家主義に
転じ、終生国家主義を主張した。

※3 ドイツの哲学者(一七六二〜一八一四)。フランスの占領下
のベルリンで行った講義「ドイツ国民に告ぐ」は有名。

■講演者紹介

照澄師は敗戦後の若者の規範たらんと比叡山に入り、千日
回峰行など数々の厳しい修行を積むかたわら、比叡山高等学
校長なども勤めた。海外との交流にも熱心で、サダト大統領、
ヨハネ・パウロ6世とともに、ユダヤ・キリスト・イスラム
など各教の連携を提案し、実現に導くなど世界平和のために
尽力した。またインドに印度山日本寺を建立、初代竺主となっ
た。世界連邦日本宗教委員会会長 日本国際青年文化協会会

長 東南寺・京都梅尾高山寺住職 比叡山延暦寺長 滋賀
院門跡。

年譜

一九〇三(明治36)年	赤磐郡岩生村原(現和気郡和気町原)元 恩寺で誕生
一九二〇(大正9)年	岡山中学校四年修了 第六高等学校に 首席合格
一九二三(大正12)年	第六高等学校卒業
一九二六(昭和元)年	東京帝国大学文学部哲学科卒業、大正 大学専任講師
一九二七(昭和2)年	大正大学教授
一九四一(昭和16)年	帰岡
一九四二(昭和17)年	合同新聞(山陽新聞の前身)論説委員
一九四六(昭和21)年	比叡山入山
一九四七(昭和22)年	千日回峰行に入行
一九五三(昭和28)年	同行満行、大阿闍梨となる
一九五四(昭和29)年	運心回峰行に入行、満行後、三年間の 法華三昧、続けて非行非坐三昧
一九七七(昭和52)年	エジプト訪問、サダト大統領と会談
一九八六(昭和61)年	アッシジ世界平和祈りの集い参列
一九八七(昭和62)年	比叡山宗教サミット開催
一九八九(平成元)年	逝去